

吃音正しく理解を

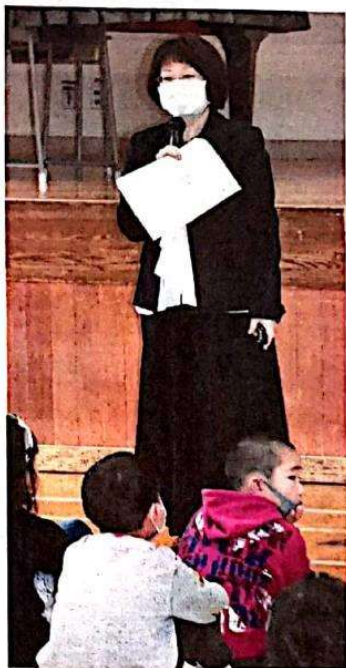
言語聴覚士が出前授業

「話をきちんと聞くこと」大切

言いたいことが頭に浮かんでいのに滑らかに話せない「吃音」。言語聴覚士を中心とする発話の訓練や助言などが各地で行われている。松本市にある神応透析クリニックの言語聴覚士、内藤麻子さん(51)は県内の学校で吃音に関する出前授業を続けている。当事者の気持ちを知り、自分に何ができるか考えてもらうためだ。

4月14日、生坂村立生坂小学校の体育館での出前授業。全校児童約70人と教職員を前に内藤さんが吃音について問いかけた。

「どうして、『あああ……』ってなるのしょう」児童たちは一様に真剣な表情に変わった。緊張したり、慌てていたりという理由ではなく、その人の話を



生坂小で出前授業を行う内藤さん(4月14日、生坂村で)

「聞く訓練の」と「話す」の回復機能。言語聴覚士は「食べる」「食生活」が自由な人に行う指導などを行う専門職。1997年から国家資格となり、有資格者は全国で約36000人。県内では2000年に設立された言語聴覚士会が、昨年6月時点で364人の会員がいる。

「きちんと聞くことが大切です」と呼びかけた。

吃音の人との向き合い方を学年ごとのグループで話し合った児童からは「話し終わるまで待つ」「優しく最後まで聞く」などと意見が上がった。

内藤さんは下諏訪町出身。もともと言語に興味があり、学生時代のベビーシッターのアルバイトでは、発達障害の2歳の子どもがゆっくり言葉を覚えていく姿をうれしそうに親が捉えている様子に心を揺さぶられた。

大学卒業後、言語聴覚士を目指して専門学校に入り、資格を取得。結婚し、自らの子育て中に知り合った母親らから、吃音の子どもを育てる親の悩みを知る。吃音について学び、松本市の民間診療所に開設された「ことばの外来」で2016年から言語聴覚士として働き始めたのを機に、吃音を正しく理解してもらいたいと17年から出前授業に取り組んでいる。

吃音は国内に約120万人、県内には約17000人いるとされる。内藤さんは「当事者にとっては自然な話し方ということを知ってもらいたい」と話し、出前授業を続けていく考えだ。

日本吃音・流暢性障害学会(事務局・金沢市)によると、言語聴覚士による吃音の出前授業は全国的にも珍しいという。小林宏明事務局長は「『ことばの教室』が併設された小学校では、研修を受けた教員らが吃音の児童から相談を受けるなどの取り組みはあるが、全国的に啓発活動は十分とは言えない」と指摘している。